第４回講座　令和２年12月16日（水）午後３時～午後４時30分

学習指導と評価

J-SHINE 理事（玉川大学大学院 名誉教授・特任教授）
佐藤 久美子

【講座内容の書き起こし】

高野先生：

皆さん、こんにちは。明海大学副学長、外国語学部長、そして本事業の責任者である高野と申します。本日は第４回のMEIKAI-JOEの講座の日を迎えました。前回は、11月25日に「Small Talkの実際とデジタル教科書への接続」をテーマに講座を実施しましたが、本日は第４回の講座内容であります。

講座内容は、「学習指導と評価」をテーマとして実施いたします。小学校外国語・外国語活動の指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料は、文部科学省から今年の３月に出たばかりでありますが、難しいという声が小学校の先生方から聞こえてまいります。そこで本日の講座内容は、MEIKAI-JOEのWeb上でも掲載されておりますが、小学校外国語・外国語活動における指導と評価の在り方について、具体的なアクティビティや児童の発表内容に基づきながら、理解する内容としております。講座の中での講師と受講者等々のやり取りも、一部行う予定でございますので、よろしくお願いいたします。

講師は、J-SHINE理事、玉川大学大学院名誉教授・特任教授の佐藤久美子先生でございます。

佐藤先生は、津田塾大学大学院文学研究科博士課程を修了後、ロンドン大学大学院博士課程に留学された後、玉川大学に戻られ、リベラルアーツ学部教授、リベラルアーツ学部長、そして玉川大学の脳科学研究所言語情報研究センター主任などを経られまして、現在現職にお就きでございます。乳幼児の、特に言語獲得発達研究に従事されており、その科学的成果に基づく英語教育を提案しております。1998年～2002年、2012年～2016年NHKラジオ番組「基礎英語３」「基礎英語２」の講師もお務めになられました。2012年度からは、NHKのＥテレ「英語であそぼ」「英語であそぼ with Orton」の総合指導をなされるとともに、2017年からNHK　Ｅテレ「エイゴビート」の番組委員も務められております。そして、2007年度より、町田市教育委員会の委託を受けまして、町田市内の学校42校に英語に関するカリキュラムの配信をなされております。東京都の様々な区市、板橋、葛飾、中央、千代田、練馬、目黒…様々な区市において、英語の研修講師や講演活動などを行っておりまして、小中一貫教育を推進されております。また、2018年度より、かいけ幼稚園、つしま幼稚園、みた幼稚園のカリキュラムの指導も開始されたと聞いております。専門は、英語教育言語学でございます。主な著書は、『こうすれば教えらえる小学校の英語』『話したいから英文法』（朝日出版）、『上手な英語の伸ばし方』（ライオン社）、『今日から私も英語の先生　小学校英語指導ハンドブック』（玉川大学出版部）など。そして『はじめて英語図鑑』『はじめて英語辞典』（学研）の監修も務められております。そして最近では、『今すぐ教えられる小学校英語指導案集』（朝日出版）、『イラスト図解 小学校英語の教え方25のルール』（講談社）、『えいごであそぼ』（プラネットオープン社）の監修など、著書が多数でございます。

それでは本日、佐藤先生をお招きしての講座となります。皆さんよろしくお願いします。

佐藤先生：

皆さん、こんにちは。玉川大学の佐藤でございます。本日も、たくさんの方々に入っていただき、うれしく思っておりま

す。今、ご紹介いただきましたが、NHKのEテレで、「エイゴビート」という番組をやっておりますが、こちらは3、4年生を対象としておりまして、目標言語は『Let's Try!』をもとにしておりますので、もし先生方、3、4年生でどのような導入をしたらいいかなと迷っていらっしゃる方は、ぜひご参考にしていただければと思います。NHK for schoolにアクセスしていただくと、指導案なども載っておりますので、ぜひご参考にしていただければと思います。また、英語辞典の紹介をしていただきましたが、最近、いろいろな小学校に行きますと、子供たちが習ったこと以外に、自分の言葉で話してみたい、自分の思いを伝えてみたい、という子供がたくさんいます。その時に、すぐに他人に聞いてしまうのではなくて、自分たちで調べる、グループの中に1冊でも辞典があれば、各自調べることもできます。もっと主体的な気持ちも上がりますので、ぜひこういうものもご活用いただければと思っています。

では、さっそく本日の講義を始めさせていただきます。本日の流れですが、以上のようになっています。
まず、「小中連携の視点を通して」ということを、話したいと思います。というのは、小学校の子供たちは、たくさん力をつけてきました。そういう子供たちが中学校に上がるわけですけど、中学校の先生にもぜひこんなことを小学生はやっているんだよ、逆に小学校の先生方にも、中学校も意外と小学校と変わらないですよ、ということを少しわかっていただければなと思います。
2つ目に、評価をするには、その授業づくりのポイントというものを押さえておく必要がありますので、それについてお話しさせていただきます。この研修の前のタスクとして、私の課した本を皆さん読んでいただいているかと思いますが、その中で「必然性」ということをたくさん述べていると思います。その必然性とは、どういうことなんだろうということについても、触れたいと思います。
それから、3つ目の評価規準といたしましては、2つのポイントがありますので、まず目標の3観点に基づいた評価規準についてお話しします。
4つ目としては、教科横断型学習、最近皆さんも「CLIL」という言葉を聞いたことがあるのではないかと思いますが、そのことについて触れながら、例えばこのように評価をする、という実践例をお見せしたいと思います。
そして、5つ目に、評価規準2です。こちらは、4技能5 領域に基づくやり方です。
そして、最後は質疑応答を予定しています。そして、参加していただく場面もございますので、ぜひよろしくお願いいたします。

まず、「小中連携の視点を通して」です。英語教育の時間について、比較してみましょう。小学校3、4年生の外国語活動は週1回、そしてこれが3年、4年と続きますので、合計70時間になります。また、5、6年生の外国語は週2回70時間ですから、2年間で140時間、つまり合計210時間ということになるのです。中学校は、週4時間×35週ですので、140時間。小学校の3、4、5、6年の4年間は、中学校の1年間よりも長い時間学習しているということです。そして、小学校、中学校ともに、4技能5領域なのです。ですから、小中連携を重視すること、あるいは学びの連続性を意識することが、いかに大切かということがわかります。
そして、そもそも外国語科、外国語の学ぶことの目標は何でしょうか。外国語活動は3、4年生、小学校外国語科は5、6年生、そして中学校・高等学校とありますが、赤字の部分は全て共通していますね。つまり、「言語活動を通して」コミュニケーションの力をつけましょうということが共通の趣旨であり、小中だけでなく、高校まで一貫したことで進んでいるということです。いかにこの「言語活動」が大切かということがわかります。
では、「言語活動」とは何でしょうか。これは、実際に英語を使って、お互いの気持ちや考えを伝え合う活動をいいます。つまり、「伝え合う」わけですから、コミュニケーションの基礎となる場面や目的、状況といったものが必要になってきます。これがいわゆる、「必然的な場」ということにつながっていきます。よく小学校では、ゲームは楽しいね、と言いますけど、ゲームをしたり、歌を歌ったりと楽しいですが、これから文字活動が入るよ、ということで、5、6年でひたす

ら書いたりという活動があったとします。でもこれは、言語活動ではないのですね。これはあくまでも、練習の1つでしかない、最後はやはり、思いを込めたことを発表する言語活動をしていただきたいと思います。
そもそも、小学校で英語を導入する意味は何でしょうか？ まさしくこの「言語活動」を取り入れること、ここが最終ゴールなのです。人前で堂々と自分の思いや意見が伝えられる、そしてお友達の話をしっかりと聞ける児童を育成しましょう、ということです。現在、国際化・価値の多様化、今の子供たち、小学生が社会人になって、仕事をする時期になれば、本当に共生の時代がもっともっと推進されていくと思います。そして、異なる考え方や文化を理解する、そうした寛容な心も育んでいきたいものです。
言語活動はどんな時に高まるのでしょうか。必然的な場面を用意して、つまり英語を話したくなるような場面を用意して、友達に英語を使って発表する、この具体的なゴールを作っていくことが必要なのです。歌を歌って楽しかった、ゲームをして楽しかった、お店屋さんごっこしたよね、で、最後どうするの？ では困るのです。お店屋さんごっこも、例えば値段のやり取りをしたり、どんな品物がいいかを聞いたり、これも1つの練習なのです。私は今こんなものが欲しいんですよ、こんな色のものでこんな形のものが欲しいんですよ、そして最後は堂々と発表ができると素晴らしいと思います。あるいは、お店屋さんのカスタマーとショップキーパーの役になって2人で発表してみる、という手もあります。このような身近なトピックを扱うこと、そして自分の考えを自由に表現できる時に、言語活動というのは高まっていくのです。
「身近な場面」ということが、学習指導要領の中ではこのように書かれています。3、4年生、5、6年生ほぼ共通です。家庭・学校・地域の行事、そして3、4年生には子供の遊びが入っていますが、5、6年生はここだけがカットで、あとの3つは共通です。特有の表現が使われる場面も、挨拶、自己紹介、買い物、食事、道案内、ここまでは3、4年、5、6年共通で、5、6年で旅行という要素が入ります。実は、中学校も全く使用場面は変わらないのです。家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事とありますので、全て小学校と共通にしているものです。唯一、特有の場面で違うのは、中学校は電話での対応とか、手紙や電子メールでのやり取りが入ってきます。ここだけが違いますが、あとは共通しています。ですから、小学校でしっかり基礎を学んでいれば、中学校に行った時に子供たちはもっと自分の思いが伝えられるようになり、こういう活動に入っていけるのではないでしょうか。

2つ目は、小学校英語の授業づくりのポイントです。先生方も日々ご苦労しておられると思いますが、私は小学校の担任の先生が実施する英語の授業が大好きなのです。小学校の先生方は、子供たちのことをよく知っています。どんなことに興味があって、どんなことが正しいと思うか、ワクワクすると思うか、そういう要素を入れた外国語活動をすればいいのです。まず、授業構成を一定にして、やり取りの多い授業を組み立ててください。例えば、Warm upで始まりますね。挨拶をしたり、あるいは歌を歌ったり、そしてPractice、今日の単語、あるいは今日の目標表現を練習しますね。チャンツでもいいでしょう。あるいは、Repeat after me.と言って、絵カードを見ながらリピートしてもいいと思います。練習したフレーズを早速使えるようなアクティビティを入れましょう。そして、ここでストップではありません。最後にそこで学んだものを十分に取り込んで、最終的には自分の言いたいことを織り込んだプレゼンテーションをしてほしいと思います。また、4技能5領域：聞くこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、読むこと、書くこと、これは中学校共通ですね。この4技能5領域をバランスよく入れた授業を工夫してください。
そして、2番目に大切なポイントとして、明確なめあてをもつことが大切です。これによって子供たちは、見通しがもてます。ゴールが明確になれば、そこに向かって、より動機付けも高まり、努力することができます。最終的な発表を意識した授業づくり、まずそこから指導案を作ることを考えればよいのです。この目標を達成するために、このアクティビティ、そしてこの導入の仕方ということが必要になってきます。
3番目に、対話的な必然性のある場面を導入するために、小学校では例えばSmall Talkでお話をしたりしますよね。例えば、ALTと担任が、What Japanese food do you like? I like Sushi. How about you? I like Tendon.などと話していれば、子供たちはあっという間に、今日は何か日本食の話をするのかな、とわかりますよね。これをしたとい

うことは、今日はこういうことを学ぶんだよということを子供たちに伝えたわけですから、最終的にはその活動をしなくてはいけませんよね。最後になって、What's this? It's Katsudon.だけではつまらないですよね。What food, what Japanese food do you like? I like Sukiyaki.と、自分の思いを込めた内容が説明できなければなりません。ですから、そういう意味でSmall Talk、中学校で言うと、Oral Introductionが大切なのです。

そして4番目に、これからきっと小学校では、随分活用されるようになるのではないかと思いますが、この「教科横断的な学習」はとても大切です。きっと、子供たちは興味があると思います。小学校において、グループの中で調べ学習をたくさんします。これを通して、対話的な深い学びにもつながっていきます。評価も例えば、2つ目の観点である、思考力・判断力・表現力、ここはこういうところを見取ることもできるわけです。調べたものをクイズにして、みんなで当てっこしてみようよ、となったらとっても楽しいですよね。5、6年生は県のことを勉強します。あるいは、1、2年生は昆虫のことなどを学びますよね。そうしたことを入れたクイズも楽しいと思います。

活動の手順というものを示し、そして練習も十分に行います。例えば、今、お見せしているものは、1、2年生でもできるかなと思います。ゴールは「好きなTシャツを作ろう」です。まずはWarm up。練習をします。そしてチャンツで2拍子の音楽に乗って、One, Two, One, Two, Red, Red, Blue, Blue, とやっていけば、すぐに子供たちは単語を覚えられますね。でも、もし1年生から導入されている学校があったとしても、決して単語だけで終わってはいけません。お母さんたちが子供たちに、赤ちゃんに言葉を話しかける時のことを想像してみてください。お散歩に行って、「すずめ」「すずめ」っていうお母さんいますか?「あら、チュンチュン飛んでるね。すずめだね、なんて鳴いているんだろうね」、こうやって話しかけるんです。その中から子供は、すずめとか、チュンチュンという単語を聞き取っていくわけです。ですから、たとえ1、2年生でも、I like red. I like blue. こういった表現も同時に入れます。そしてアクティビティ、お店屋さんごっこは楽しいですよね。お客さんとお店屋さんに分かれます。Hello. Hello. I like blue. Oh, you like blue. Here you are. Bye. Bye.このようなアクティビティは、できると思います。ここでは、必ず何か好きなものを言って、例えば折り紙がいっぱい売っているお店屋さんに行って、ブルーの折り紙を買ってくる、ピンクを買ってくる、イエローを買ってくる、そして3つくらい集めたら、じゃあこの白紙のTシャツのワークシートに好きなように貼って、デザインしてごらんと言ったら、楽しいじゃないですか。デザインしたものをみんな一つずつ持って、発表するのです。I like blue. I like orange. I like pink.と言って、Tシャツを見せます、みんながWow, beautiful! とても楽しいですよね。子供たちは、発表することに段々慣れてくると、自信が出てきます。そうすると、英語の授業だけではなくて、国語や社会や算数も、きちんと自分の意見が言えるようになると思います。これがコミュニケーション能力を身に付けるということですよね。これは低学年でも、中学年だって応用することはできるのです。

例えば、デザイナー(D)とお客様(C)に分かれて、アクティビティしてみます。これが必然的な場面です。

D：What color do you like?

C：I like blue.

D：What shape do you like?

C：I like hearts.

D：How many hearts?

C：Three, please.

D：OK.(描く)。Here you are. Do you like it?

C：Great! I like it. Thank you.

こんなやり取りだったら、中学年にぴったりですよね。これを、Tシャツのデザインでもいいし、スニーカーのデザインでもいいし、あるいはクラスの旗を作ろう、といったテーマにもっていってもいいわけです。グループの中で、例えばクラスが2組なら2は入れる、でも、あとはいろいろな模様を入れるんだよ、ということを考えて練習していくと、これが必然的な場面になります。

または、What's this? It's ～ .の目標表現、この場合のゴールは、「私の好きな給食を紹介する」です。

HRT：It's Yakisoba.

ALT：What's Yakisoba?

HRT：It's like fried noodles.

ALT：How is it?

HRT：It's very good.

よく小学校の中に、ALTの方がいらして、たまに給食に参加してくださることがありますよね。そんな時の会話に使えるじゃないですか。ALTが遊びに来てくれたら、みんなでこんなことを言って給食を食べようよ、と言うと、気分も盛り上がっていきますね。

必然性のあるActivity。例えば、When is your birthday? これは『We can! 1』の５年生、Lesson 2に載っていました。お誕生日をまず聞くんですよね。When is your birthday? My birthday is May 25th. などと答えます。ある京都の小学校でご指導させていただいた時に、その先生がおっしゃいました。うちの小学校は、5年生と6年生で7人ぐらいしかいないんです。保育園の時からずっと一緒に過ごしているので、お互いの誕生日を知っています。だから、必然性は全くないんですよ。そうですよね、じゃあどうしようかなと思って、When is your special day? に変えましょう、って言いましたら、私が想像したのは、例えば My special day is January 17th. It's my mother's birthday. このような感じかなと思ったのですが、担任の先生がやった活動はこのようなものでした。

月の名前にまず色を塗ります。日にちにも色を塗ります。そして、ここは目標表現ですから、きちんと英語で伝えます。When is your special day? My special day is October 31st. Halloween. ここのHalloween.の部分は、書ける子は何か見ながら書いてもいいよ、でもちょっと英語がわからなかったら、ローマ字でもいいんだよ、どうしても難しかったら日本語でもいい。なぜならば、目標表現ではないからです。そして好きな絵を描かせます。

皆さん見てください。When is your special day? どんな作品ができましたか。（作品提示）My special day is February 26th. Wedding Anniversary. これは子供ではありません。まず、先生が自分の作品を見せました。次の作品はWhen is your special day?（作品提示）My special day is July 7th. 骨を折った日。確かに骨を折った日は難しいですよね、英語では。見てください、この作品。鉄棒があって、小さい男の子がちょっと落ちてきました。で、骨がパツンと折れてしまった、そして今、こんな状態なんですね。なんと、7人しかいない5年生に、2人いました、骨を折った日という方がね。次は、When is your special day?（作品提示）My special day is October 25th.「巨人日本一！」。今年は日本一にはなれませんでしたけど、これは子供たちの思いが本当にこもっている、つまり言語活動ですね。

このように思いがこもっていたら、これは目標表現がきちんと言えているから、話し方のところはＡ 評価です。巨人日本一、日本語じゃないですか？ となるかもしれませんが、でも、ここでは目標表現ではありませんし、一生懸命自分の想いを伝えようとしている、と考えたならば、「よくできました」のＢでもいいですし、最初から先生は日本語でもいいよ、と言っているので、絵も素敵だし、すごく堂々と話せたとなったら、主体的な態度はＡ評価でいいんです。

評価規準について、まず1つ目の規準です。先ほど高野先生からご紹介がありましたが、今年の3月に文部科学省からこういった冊子（「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料）が出ました。第1編、第2編、第3編…と、このような内容が書かれていますが、特にこの3番の評価の観点の整理と、7番の評価の方針等の児童生徒や保護者への共有、そして第3編第1章、内容のまとまり、つまり4技能5領域です。この点について具体的にお話ししていきたいと思います。

まず、学習指導要領がこの4月から施行されました。3つの目標観点があります。知識及び技能、思考力・判断力・表現力、そして学びに向かう力、人間性等。今回のこの評価というのは、先生方が子供たちに一方的に評価を下すとい

うのではないのです。どのような資質や能力が、子供たちに本当に身に付いたかを考えて成果を見て、そして先生方が、「主体的、対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図ってください、というものです。例えば、When is your birthday? My birthday is May 25th. というように、これがきちんと言えるようになりましたね。これを、うちの小学校はAとしようと決めたら、それはAでもいいのです。でも、Uh, your birthday is May 25th. My birthday is May 21st. と、もし返せるようになったら、つまりリアクションであったり、感想であったり、自分のことを伝えられる、こんなことをさらに言うことができるようになったら、これをA評価にしようと決めればいいんですね。こういう表現が全く出てこない、目標表現はきちんと覚えられたけど、でも、Wow! とか、Really? とか、That's nice! とか、何もリアクションが出ないとなると、少し私の授業は発表が足りなかったのかな、もう少し子供たちに自由に話させるような時間が必要だったかな、と先生方が反省をして、じゃあ、次回はこんな授業をしよう、と組み立てていくのです。これを、「指導と評価の一体化」といいます。言ってみれば、「PDCA」サイクルの確立だと書いてありました。

私なりに、「PDCAサイクル」をちょっと考えてみます。例えばプランニング。これは、指導案を考えます。そして、授業を実行します。そして、どうだったかな、子供たちがいきいきと自分の表現をしていたな、といったことを評価します。これがよかったなとか、じゃあこれをもうちょっとこうしようかなと考えて、改善をしていきます。よかった時は、目標とかめあてが明確になってきますよね。子供たちの様子を見て、やはり、めあてをきちんと言うといいんだなとか、それからSmall stepを通して練習させていくと、子供たちも理解しやすかったし、見通しがもてたな、さらに問題点もわかったな、これはよかった時です。でも失敗例もありますよね。例えば、Small stepsがなくて、いきなり目標表現から発表になってしまった、またはその発表が欠如していた、あるいはアクティビティでは、練習はひたすらしているけれど、Repeat after me, repeat after me.と言って、子供たちが楽しそうではなかったな。あるいは、ゲームをして楽しそうだったけれど、表現は全く定着していないな、となったときは、これはちょっとやり直さなくてはならないなと考えていけばいいんですね。ですから、この判断基準、評価の規準もなんとなくではなくて、各学年で、あるいは各小学校で考えていくということが大切なのです。

そして、改善に向けての検証になります。この観点別の学習状況の評価というのが、今ご紹介したような目標の3観点に沿ってつけていく評価方法です。そして例えば、話す場合が多かった授業で、じゃあ今日話すところにポイントを当てよう。知識・技能もA、それから主体的な態度もAということで、とてもAが多い、一学期間を通してA・A・B・A・Aという成績であったならば、Aが多いので最終的には3とつけよう、とか、B・B・A・B・B・C・C・B・B・Bとなった場合は、やはりBが多いから、これはB評価だ、と考えます。こういった観点別学習状況の評価や評定には示しきれないような児童のよい点や可能性、進歩の様子を「個人内評価」という形で書くこともできます。

この評価の3観点に基づいた評価の仕方、学習評価の場面や方法を工夫してください、と冊子には書かれています。あるいは、最終段階だけではなくて、学習の過程や成果も評価に入れてくださいね。そして、「学習指導・評価」は、組織的かつ計画的に。ここです、ポイントは。つまり、今日は足立区からも、あるいは浦安市からも、横手市からもいろいろな小学校が参加されていますが、それぞれの小学校で決めていただければいいのです。あるいは、学年によってうちの学校は、まだ少し大変だから、目標表現ができたらAにしようと決めていただければいいということです。3つ目に、主体的・対話的で深い学びの観点から、授業改善や評価を大切にしていきましょう。また、児童生徒の学びの振り返りもとても大切なんです。子供たちは、とてもよいことを伝えてくれますよ。ある小学校に行った時、東京は修学旅行ではなく、最後の移動教室は日光に行きます。その時、こんな発表がありました。I went to Nikko. I bought Kasutera. It was delicious. Thank you. そして振り返りの時、私はこのように発表したけれど、あるお友達が、Kasutera was soft.と言っていて、ソフトもいい言葉だなと思った、とか、私はThe shrine is beautiful.と言ったけれど、あるお友達は、The shrine is gorgeous.と言っていて、これもいい言葉だなと思った。素敵ですよね。これこそが、決められた知識・技能以外の、思考力だったり、表現力だったり、主体的な態度だったりということですから、ここの部分はAをつけることができるのではないでしょうか。

学習評価の場面や方法の工夫、過程や成果を評価に入れてください、と書かれています。例えば、知識・技能を見たいと思ったら、ペーパーテストで知識の習得を問うだけではなくて、もっと様々なことをバランスよく入れてください。例えば、文章による説明でもいいし、観察・実験でもいいし、式やグラフで表現するのもいいと思います。英語とちょっと関係ないのでは、と思われる先生方いらっしゃるかもしれませんけど、実は英語も大いに関係あるのです。
それから、思考力・判断力・表現力は、例えば絵を描く、先ほどの、Who is special? で、子供たちは、イラストを描きました。あのイラストがとてもインパクトがあって、友達によく気持ちが通じるのではないか、あるいは自分も思いが通じるような、素敵なイラストを描いていたら、それで評価をしてあげることができるのです。
また、主体的に学習に取り組む態度としては、もちろん、授業中にHi! It's me! とか、そうやってLet me try!とか、一生懸命手を挙げているお子さんがいます。もちろんそういうことも評価していいのですが、ちょっとそういうことができにくいんだけど、文字が入ってきたらきちんと、ノートを書いて、大文字と小文字の区別、頭の大文字、最後のピリオド、あるいは分かち書きになっている、きれいに書いてあるとしたら、そういうところも評価してあげてくださいということです。
そして、自己評価、これは大切です。さきほどの振り返りの様子なども参考にしながら、評価することもできるのではないでしょうか。取り組みの中で、話をする中で、自分の学習を調節しようとしている、そんな側面も見取って差し上げたら、子供たちにはプラスになるかと思います。
先ほども申しましたように、毎回の授業で全てのものをつけることはできません。今日はやり取りをよく見てあげようと思って、やり取りの部分で、例えば、知識・技能が非常によかったねとか、あるいは主体的な学びがよかったねとか、そうやって、AやB、Cをつけていきますよね。その平均を取って、中学校であるならば、5・4・3・2・1、小学校では3・2・1をつけるということになります。そして、見取れない、それだけでは見取り切れない、もっともっといいものがあったとしたら、個人内評価をつけください。

ここで「CLIL」についてご紹介したいと思います。CLILは、「C-L-I-L」とつづりますが、Content and Language Integrated Learningと言います。「内容言語統合型学習」、つまり教科をまたいで、英語に取り入れて勉強していきましょう、という話です。学習指導要領にはこのように書かれています。各教科、例えば社会、国語、理科、算数、英語、それぞれを一生懸命勉強することはもちろんのこと、さらに教科横断的な視点で組み立てるということは、大切なことです。教科横断的な視点を入れて、その現代の問題について考えていく、対処していく、そんな取り組みが大切です、と書かれています。
これは、小学校5年生の例です。社会科の授業で、都道府県についてのクイズ大会をしようというテーマで行われたものです。ゴールは、日本の気候や地形などについて理解を深め、基本的な表現を用いて伝え合う、です。5、6年生はもう都道府県のことを習っているので、子供たちでいろいろ調べます。例えば、季節はもう知っていますね。hot/coldも知っているかもしれません。農業のrice/potato/tomatoも知っているでしょう。新たに、a little とa lotを取り入れました。例えば、It rains a lot.と、It rains a little.というような例ですね。1校時目では、日本の気候、地形、もうすでに社会科で習ったことについて、英語でみんなで言ってみよう、という振り返りをしました。It's cold in winter.とか、It rains a lot in June and July.これは太平洋側ですよね。こんなことを、みんなで英語で復習をします。そうしたら2時間目は、英語の授業ではなく、社会科の授業で、地図帳やインターネットを使って、CLILに出す地域の有名なものを調べてみましょう、という活動が入りました。グループで、各県とか都道府県、好きな場所を選んで、気候、地形、食べ物、観光、なんでもいいのでみんなで調べます。そして、クイズなので、ヒントとして適切なものはどれかな、たくさん調べるわけです。その中には、習ったことのない単語もあるでしょう。だったら、辞書で調べよう、ということなんです。それを英語で書いて、4時間目、5時間目、6時間目、1文ずつ丁寧に書いて行って、最終的には8時間目、9時間目は、これの発表です。グループの子たちが4人前に出てきて、自分たちで書いたり貼ったりした写真

を見せながら、Hint 1. It's very cold in winter. はい、次の子。Hint 2. It's famous for snow festival. はい、次の子。Hint 3. It's famous for Ramen.とやっていくと、「ああ！」、ってみんな段々とわかってきますね。The answer is Hokkaido!と なるわけです。

このクイズのヒントづくりなども、例えばこの学校は2年生にもやったそうです。2年生には易しいヒントをみんな考えたそうです。私の大学院の学生さんたちを、オンラインでこのように登場させました。子供たちは、とても張り切りました。院生なんだから、難しいのを考えようと、8グループありましたから8問出たんですけど、うちの学生たちは、2問答えられませんでした。それくらい頑張りました。子供たちは振り返りで言っていました。調べ学習が楽しかった、クイズ作りが楽しかった、自分たちの想いを伝えられたから、難しいとか、大変だったとか、そういう意見はなかったですね。

この4つのCが大切だと言われています。まず、言語知識・技能にあたる、Communicationです。これは、聞く、話す、読む、書くに通じていきます。それから、CognitionのC。これは認知力、つまり学年あるいは年齢に合った内容ということですよね。これは思考力、今5年生だから県調べでよかったわけですね。これを、2年生や3年生で出してはいけませんね。これが深い学びに通じます。そしてContent、内容は教科の科目あったり、あるいはトピックであったり、例えばお天気だったら、1年生でもできますよね。そして、CommunityのC というのは、Cultureに置き換える方もいます。スクールの文化、あるいはその県の文化、あるいは日本の文化、そして世界の文化と場面を広げていくと、いろいろな対話的な学びにつながるのではないでしょうか。

県名当てクイズはちょっと難しかったですね。今度はもっと簡単な図工と組み合わせた3年生の例をお見せしたいと思います。今日はJ-SHINEの事務局長をしている鈴木菜津美さんにちょっとお手伝いをしていただきたいと思います。菜津美さん、お願いします。

鈴木事務局長：お願いします。

佐藤先生：

3年生の図工の時間と英語の時間を組み合わせて、こんなことができるよ、ということで、単元は「色の名前」です。Step 1: 1校時目は、色のカードを見せながら、あるいはチャンツで色を勉強していきます。Red, Red, Yellow, Yellow, Blue, Blue　このようにすると、1年生でもあっという間に、2年生もあっという間に単語は覚えられますよね。そうしたら、次は「色の足し算プリント」です。例えば、OK, Natsumi. blue + red make?

鈴木事務局長：Purple.

佐藤先生：That's right, purple!

早速やってみましょう。例えば色水を持ってきて、ブルーとレッドを入れたら、Wow, purple! 素晴らしい！ということになりますよね。で、ここにa bit ofという単語をちょっと紹介しました。なんか響きがいいですね、「ちょっとよ」と。じゃあ行きますよ、菜津美さん。Black and a bit of white make?

鈴木事務局長：Gray.

佐藤先生：That's right, gray!　みんな、他に考え出すことできる？ 他に何かある？ さぁ、ここからです、子供たちに頑張ってほしいのは。今言ったように、Red, yellow, blue, 言えるようになりましたね。それから、先生の言っていること、わかりました。Blue plus red make purple, わかりました。これ、よくできました、で、B評価だね。でも、もっと自分で考えられたら、これ大変よくできました、だよ、さぁ考えてごらん。Hi, Natsumi, how about you?

鈴木事務局長：Unn, blue plus a bit of white

佐藤先生：Blue plus a bit of white…

鈴木事務局長：Makes sky blue.

佐藤先生：Wow, sky blue. Beautiful! Wonderful!　ね、素晴らしいじゃないですか。スカイブルーまでは出ないかもしれないけれど、ブルーくらいは出ますよね。Light blue なんていうお子さんもいますよね。そうしたら、これは評価Aではないですか。このように、先生方、いろいろな場面で見てください。

次は3年生の算数です。算数も、One, two three, four, five, six, seven, eight, nine, ten, Ok, repeat after me. Ten, ten, なんかちょっと退屈しちゃいますよね。ということで、ちょっと違う、これがCLILです。例えば、1時間目は数字がきちんと言えるようになることが大切ですね。次の2時間目では、こんなゲームをしていきます。これはverbal game, 言葉のゲームですよね。

OK, everyone. Let's do the number game. Yeah! OK, yeah. OK, let's use fingers. OK, show me your fingers. はい、会場の皆さんもやってみましょう。Show me your fingers. OK, そうそう、いいですね。Show me your fingers. When I say one, show me one finger. OK, 会場の皆さんもご一緒にいきますよ。One, three, five, OK, more faster? One, two, five, one, three, できましたか? はい、こんなふうにしたら、これ3年生もちろんできますよね。

じゃあ次は、もうちょっとステップアップします。Lucky seven game　です。また菜津美さんにお手伝いしていただきましょう。OK, show me your right fingers.

鈴木事務局長：Right.

佐藤先生：That's right, this is right fingers. Only use the number, one, two, three, four, five, very good. Just five, all right. Try to make the numbers of seven, make seven, make seven. And last, please say lucky seven. I am a homeroom teacher, you are ALT, OK? First. Two plus,

鈴木事務局長：Five is

佐藤先生、鈴木事務局長：Lucky seven!

佐藤先生：Very good! OK, one more time. じゃあ今度はボランティア、Any volunteer student?

鈴木事務局長：はい。

佐藤先生：OK, Natsumi. Listen to me carefully, alright? Let me see, four plus

鈴木事務局長：Three is

佐藤先生、鈴木事務局長：Lucky seven!

佐藤先生：Wonderful! Thank you Natsumi san. Very good, well done.

鈴木事務局長：Thank you.

佐藤先生：

というように、やることもできるのです。だからこれも、数字がちゃんと言えたよ、これはB評価。でもラッキーセブンをたくさん考えたらちょっと楽しいじゃないですか。こんな子にはA評価をあげたいですね。これがもう少し簡単に、例えば□+□is eight. これを黒板に書いて、じゃあ先生がいう数字書いてね、行くよ、Two plus six is eight.　さぁ書けたかな、って言って書けますよね。こんなのは、いいじゃないですか。このぐらいできたら、B評価だね。でも、じゃあAnyone? もっと考えられたら、さぁA評価だよ、とあらかじめ子供たちに言うんです。これが、動機付けを与えるきっかけで、評価を共有するということなのです。「さぁ、どんどん考えて英語で言えたら、A評価だよ」、というと、必ず何人か出てきますよね。最近は塾に行っているお子さんもいれば、海外のリターニーの方もいるかもしれません。でも、あなたはできるからいいの、ではなくて、そういう子にも活躍の場を与えてあげましょう。英語はできるかもしれないけど、体育はできるとは限りませんよね。だから、英語ができる子はできる子で、そこで活躍させてあげて、OK, very good. 例えばその子が、Three plus five is eight. って言えたとします。Wow, nice. OK everyone say together. ここでみんなで共有するのです、Three plus five is eight. のように。そうすると子供たちは、なんかいいな、ああいうふうになれたらいいな、とよい方に気持ちが向いて行きますよね。このようにできたら、主体的な学びも、思考力・判断力もA評価になると思います。

伝えたいという気持ちを育むためには、今のように必然性、それから目的意識、それから基礎表現は話せる、でも、もうちょっと言いたかったら言えるよ、それでもいいんだよ。それで暗記の部分を少なくしてあげるということですね。そうすると、自信が出て、自分の話を伝えたいという気持ちが沸き上がると思います。

ここで最後の　Let's enjoy CLIL quizをやってみたいと思います。会場の方もご参加ください。最初、足立区の先生方、そして皿沼小、亀田小の代表の先生方、それから浦安市の先生方も、横手市の先生方もちょっと代表の方、前に来ていただけますか。クイズに答えてみてください。大いに楽しんでくださいね。

（拠点校とのCLIL Quiz）

佐藤先生：Raise your hands please. OK, thank you. OK, let's enjoy CLIL quiz. Yeah!

東京都足立区（会場：区立皿沼小学校）：Yeah.

佐藤先生：

OK. Three hit quiz one. OK, what's this prefecture? What's this prefecture?

ちょっと難しいですね。Hint please.と私に言ってください。

皿沼小：Hint please.

佐藤先生：OK. It's famous for oranges. Oranges. And it's famous for very high mountain. What's this prefecture?

皿沼小：OK.　It's Shizuoka?

佐藤先生：

Wonderful, wonderful! Look at this, Shizuoka prefecture. Very good, well done!　こういうクイズであれば、子供たちもいくつも考えることができるかもしれませんね。OK, thank you. Then next, 亀田小学校の先生、Raise your hands please. OK, thank you.　いきますよ。　Hint quiz two. Who am I? Who am I? わからなかったら、何と言うのでしたか？ Ask me hint…

東京都足立区（会場：区立亀田小学校）：Hint please.

佐藤先生：

OK, hint please. First hint. I am black and sometimes red. I have six legs. I am very small. Who am I?　I am usually black, yes. I am usually black. And I have six legs.

亀田小：Ladybug.

佐藤先生：

Ladybug！　そうですよね、Ladybugも当たりかもしれませんね。私が意図していたのはこれだったんです。ちょっとね、これ意地悪ですね。普通、子供には、I'm blackって言うんですけど、今日は先生方がお相手なので、redも入れてみました。Ladybugも大正解かもしれません。Thank you. Next. 浦安市と横手市の先生方、ちょっと難しいですよ、最後は。浦安市の先生、まず、What language is カステラ from? これは難しいです、当てずっぽうでもいいんです、Make guess. What language is カステラ from?

千葉県浦安市（会場：市立明海小学校）：Portugal.

佐藤先生：

Very good, very good! Portuguese, very good. OK, では横手市の先生。What language is カルタ from? カルタ.

秋田県横手市（会場：市立雄物川小学校）：Karuta… German.

佐藤先生：

German. Close, close. But not. Close. It's from Europe. Portugal, Portugueseなんですよ。難しいですよね。はい、浦安市の先生3番目。What language is Ink from? It's from…

浦安市：America.

佐藤先生：America. Nice try, but not. 横手市の先生、どうでしょう？

横手市：It's from Italy.

佐藤先生：

Italy, you know, インフルエンザis from Italy, なんです、実は。Ink is from Dutch. Holland, オランダなんですね、

難しくて面白いでしょう。シュークリームis from French , Ice cream is from English なんです。実はこれは、私が作ったのではないんです。子供たちが作ったんです。町田の子供たちにやらせたことがあります。そうしたら、子供たちは、もういくつも、いくつも、たくさん作ってきました。男の子2人がとても熱心で、ペアを組んでいる女の子に、僕いっぱい考えてきたんだよ、って。そうしたら女の子は、ごめんね、私は1つか2つしか考えられなかったって。大丈夫、僕いっぱいあるからと、もう次から次からと出していました。Where is アジト from? とか、Where is ランドセル from?とか、たくさん出していて、終わった後に先生に、「英語が大好きなお子さんたちなんですね」と言ったら、「いや、あまり好きではないんですよ、実はあの2人、英語は」「そうですか?」「普段の授業もあまり好きではないんです」「そうですか? あんなに元気に発表していたじゃないですか」「だってあの子たち、クイズが好きなんです」と言っていらっしゃいました。楽しいですよね、こういうものを、どんどん考えてみてください。これは、必然性です。普段できない子でも、こんなたくさん考えてきたら、もうこれは主体性A評価ですよね。

オーソドックスに、5年生に「自分の行きたい国は?」と聞いたら、Where do you want to go? I want to go to ～.などの表現が出てきますよね。例えば、最終的にはこんな発表をさせたいと思っています。Where do you want to go? I want to go to Brazil. You can see Iguazu Fall. Thank you.のようなお話です。最初は少し練習しなければなりません。この「メモリー・ゲーム」は、ゲームの中で言葉をたくさん使うので、非常に有益なんです。私は、「えいごであそぼ with Orton」という番組もずっと監修していますが、番組でもこのゲームをよく取り入れています。楽しいんです。4、5歳の子供たちは、4つか5つも言うと、もう言えなくなってしまうんですけど、I can see Iguazu Fall.で、次の子供がYou can see Iguazu Fall, I can see the carnival.と、どんどん加えていきます。それで、You can see Iguazu Fall, you can see the carnival, I can see coffee farms.というように、続けていくことができます。

さらに、You can eat ～.やYou can see ～.You can buy ～.など、基本的な言い方を練習します。それで、例えば、旅行社とお客さんに分かれて、練習をしていくわけですね。AとBの会話ですが、このピンクのところだけが言えれば、これは目標表現ですので、Where do you want to go? I want to go to Brazil. You can see Iguazu Fall. Thank you. これで十分いいですよね。だから、これはもう目標表現でも難しいのはきちんと言えたから、これはA評価と決められたら、A評価でももちろんいいです。でも、旅行社だから、もっとたくさんいろいろなところを入れようねと言って、このブラジルの写真を貼ったり、あるいは絵を描いたりして、集めてきたものを自分で発表するときに、さらにこのAくんが、You can eat “Pon de kejo”.と言って、パンのようなものを調べて貼り付けてきました。そうすると、この子は目標表現以外にまだ入れてくれたわけです。そうしたら、思考力・判断力・表現力は、BからAになりませんか? そして、主体的な態度もAになると思うんですね。こうやって見取ってあげるとよいと思います。

これは旅行社の発表風景です。グループがそれぞれ1つの場所を選びました。これは、イタリア専門の旅行社です。そこにお客さんがきます。調布市のある小学校で行われた例です。

旅行社：Hello.

お客さん：Hello.

旅行社：Where do you want to go?

お客さん：I want to go to Italy.

旅行社：Oh, I see. You want to go to Italy. Why?

お客さん：I want to see Rome.

旅行社：Wow, it’s nice! Let’s go to Italy! You can see the Colosseum.

お客さん：What’s that?

旅行社：This is the Colosseum.

お客さん：Oh, I see. It’s big!

旅行社：Yes. It’s exciting. Do you know it?

お客さん：No, I don't.

旅行社：You can eat pizza, too.

というように、ここまで話すことができました。素晴らしいですね、5年生です。ここまで来たら、思考力・判断力、知識・技能、主体的態度、オールAだと私は思いました。このスクリプトは、A-B、A-B、＋αという考え方です。

例えば、中学校でも今はこのようにやっています。Who is your hero? は小学校でもやりますが、中学校でも習います。そこで、ライティングをする時には、例えば、8文以上かけたらB、6文以下だったらC、ということをあらかじめ子供たちに伝えておきます。そうすると、子供たちはだいたい10文以上を目指しますよね。まず、子供たちにも共有しておくということがとても大切です。

7番目にはこのように書かれています。学習評価の妥当性、信頼性を高める。そして、児童生徒自身に、学習の見通しをもたせるために、様々な機会を得て、こういうことを共有する時間を設けて、保護者にも共通理解を図ってください、とあります。

最後の「評価規準2」です。こちらは、内容のまとまりごとのものですが、つまり、4技能5領域に沿ってつけましょう、ということです。これをよく考えてみると、知識・技能、それから思考力・判断力・表現力、そして主体性、でプラス。４技能5領域なので、5領域×3観点＝15通りの評価のマス目ができるのですが、実際にこんなにつけるということは無理です。ですから、それは先生方で考えればいいと思います。例えば、「聞くこと」では、日常的な情報を聞き取るということが、学習指導要領にも載っています。今日は、その「聞くこと」に焦点を当てて、それから「話すこと」も少し入れて評価をつけよう、などと決めればいいわけです。「聞くこと」にある知識・技能は、先ほどのように、誕生日とか、ほしいものを聞き取っているかどうか。それから、思考力・判断力・表現力であれば、相手のことを知るために、具体的な情報を聞き取ろうとしているか。そして、主体的態度です。これは知識・技能、思考・判断・表現と同じ基準になります。When is your birthday?　My birthday is May 25th. What do you want for your birthday? I want a bike. これは目標表現をきちんと言えたので、うちの学校ではAだね、と決めたらAでもいいんです。でも、もしうちの学校は結構このぐらい言えるかな、と思ったら、これはよくできました、のBにします。例えば、Aさんの場合、I want a bike.と言われた後で、Oh, you want a bike. I want a watch.のように言えたとします。自分のこともさらに加えたら、これは思考力・判断力・表現力はA、知識・技能もA、主体的な態度もAに上げていいのではないでしょうか。あるいは、My birthday is May 25th.と言われて、Oh, your birthday is May 25th. My birthday is May 23rd.と、ここまで返せるかどうかわかりませんが、慣れてくれば子供たちも結構言えるようになります。そのように評価を付けていきます。

そして、「読むこと」については、あまり小学校では評価する場面は少ないです。ですから、例えば先ほどの県当てクイズなどのように、子供たちが描いたポスターを、違うグループの子が読んでクイズを出す。そうすると、お友達が描いたものを読まなくてはいけない。ここで、「読むこと」の評価も可能です。あるいは、自分たちの描いたポスターをお互いに読み合うということもできると思います。そして、「話すこと［やり取り］」は、これはいろいろな場面で使うことができるので、あまり苦労しないと思います。指示、依頼をしたり、その場で質問に答えたりというのは、例えば、Come here, please. これも依頼です。How much is the bag? It's five hundred yen. このような言い方は、即興的に答えなくてはいけない質問です。ただ、小学校の場合は、それほど即興的ということに重きを置く必要はないのです。流暢さや即興性は、中学校に上がってから評価の対象になってきます。

そして、「話すこと［発表］」は先ほどの県当てクイズでも、色の足し算でもなんでもいいのです。自分の気持ちがこもっていれば、多少間違えても、知識・技能、思考・判断・表現は、OKなのです。

加えて、「書くこと」も入ってきましたが、ひたすら書かせる、あるいは文をたくさん書かせることは避けていただきたいと思います。文を書くとしたら、せいぜい1時間に1文ずつ書いていけば、県当てクイズも5時間+5文で十分にヒント

のスピーチができるということになりますね。あとは、スペルアウトは非常に効果的です。例えば、My name is Kumiko. K-U-M-I-K-O, Kumiko.などといったことです。そしてこれは、noseを探そう、のようなクロスワードパズルですが、子供たちはこのようなものも上手に作ります。あるいは、小学校ではGreetingをしますよね。5、6年生になったら、What's the date today? It's December 16th.と言ったとします。そうしたら、December. How do you spell it? D-E-C-E-M-B-E-R. December. と、毎回このように言っておくと、Decemberと、今度はすらすらと書けるようになりますね。そのような工夫をされたらよいと思います。

最後に、学習指導要領ではこのように書かれています。慣れてきたら、音声や態度にも注意させましょう。Banana, December アクセントがきちんと付きますね、単語に。あるいは、Are you a student? I like apples. Yes/No クエスチョンは上がります、Whクエスチョンは下がります。そういうところも、慣れてきたら子供たちが評価の対象にしてあげるといいと思いますが、最初は難しかったら、あまり発音とかは気にする必要がないかもしれません。
最後にまとめます。学習評価の進め方です。単元の目標をまず作ります。そして、単元の評価規準を先生方で話し合って、作ります。そうしたら、今度は指導の評価の計画です。どんな場面で評価をしたらいいかを踏まえて、そしてこのような感じだったらおおむね満足できるからBだね、これはもうちょっと頑張ってほしいのでCだね、ということを決めて、指導案に沿って授業を行います。そして、観点ごとに今日は発表がAだったね、聞き取りはBだったね、というように、毎回少しずつ付けていって、そして最後の学期に3・2・1でまとめていただくということです。今、お話ししましたように、子供たちは、いろいろな場面でいろいろな能力を発揮しているので、ぜひ最後のでき上がりだけではなくて、いろいろな場面で、途中成果でも見取っていただければと思います。
あと25分くらい残っていますので、どうぞ遠慮しないで質問がありましたら、前に出てきて聞いてください。今日の話の質問でもいいですし、普段からこのことについて悩んでいる、というお話でも全然構いませんから、いい機会ですので、ぜひご一緒に学びたいと思います。

==========

◆質疑応答

浦安市：

今日はありがとうございました。日の出南小学校の横山かおりと申します。
必然的な場面ということで、1つアイデアをいただきたいと思います。道案内の単元で、子供たちは例えば、Go straight for one block.や、Two blocks.など、ブロックを使って道案内をするように学習するんですね。子供たちの感想を読んでみますと、自分も外国の人や、道に迷っている人がいたら、それを使って道案内がしたいと書いてきていますが、日本の場合はどちらかというと、ブロックよりも信号機、2つ目の信号に、という言い方をするので、何かその辺でアイデアがないかなと思いまして。実際に聞かれた時に、ブロックでは子供たちは地図上ではわかるのですが、実際の道では答えにくいと思うので、何かアイデアがあったら教えていただきたいと思います。

佐藤先生：

とてもよいご質問ですよね。そうですね、日本はブロックにはなっていませんよね、京都とか碁盤の目になっているかもしれませんが。信号機は、The traffic lightと言います。そうしたら、at the traffic lightという言葉をまず覚えさせます。あるいは、例えばGo straight and stop at the traffic light. それで、at the traffic lightもfirst traffic light か、second traffic lightか、third traffic lightかで、どんどん難易度も上がります。そして、turn あるいはgo straight and turn right at the second traffic lightであると、2つ行って曲がるんだな、traffic lightを入れるのは、本当にいい考えなので、ぜひご利用してみてください。そして、Go straight and turn right at the first traffic light. Go straight and turn left at the second traffic light.のような応用を入れてはどうでしょうか。

配信スタッフ：

続いて、亀田小学校いかがですか?

亀田小：

亀田小学校です、よろしくお願いします。1つ目、CLILのことをお伺いしたいです。担任が、英語で他教科のことを教えるのは、とても意味があると思うのですが、担任からするとすごくハードルが高くて、単純に自分の英語力や子供に理解させることを考えると本当にレベルが高いと思います。ただ、やって効果があるなと思いますので、何の時間にどれくらいやったらいいのか、例えば算数の時間を使って、45分間英語を使ってそれを教えることは、ちょっと現実的じゃないなと思うと、具体的にどういう仕方があるか少し伺いたいなと思います。

佐藤先生：

そうですよね、私も45分間、算数の授業を英語でやってください、と言われたらパスですよね。ちょっと負担です。そんなにたくさん入れなくてもいいし、あと、英語の授業の中で、例えば、数字を習うとしますよね。2桁とか3桁を習ったら、そこでちょっとプラスの足し算をやってみる、その程度です、イメージは。だから、Two plus three is…と言ったら、みんながFive! と答え、先生がThat's right, five. そして次。Next. Twenty-one plus twenty-four is…と言ったら、Forty-five. この程度です。これでも十分に英語ですよ。ただ、今まで数字と言うとひたすらに、One, two, three, repeat after me, twenty one…と言ってもつまらないじゃないですか。だから、ちょっと算数を入れたりするのです。あるいは、例えばHow old are you?と聞く。これは習っているじゃないですか。女性の先生に年齢を聞くのは失礼なので、男性の先生がそちらにお2人いらっしゃいますよね。では、手前の先生、How old are you?

亀田小：I'm 31.

佐藤先生：Thirty-one years old, very good. では、後ろの先生。How old are you?

亀田小：I'm 37.

佐藤先生：

Thirty-seven? OK, thirty-seven. じゃあみんなでやってみようよ。Thirty-one plus thirty-seven is…3人でどうぞ。

亀田小：Sixty-eight.

佐藤先生：

Wonderful. ほら、楽しいじゃないですか。この程度のことです、CLILというのは。あまり深刻に考えないでください。その程度です。

亀田小：

2人目、清水と申します。先ほど先生が話された、A評価をつける子供というか、ある程度決まった文が言えるのがB評価、+αで自分のことを付け加えたり、さらに突っ込んだ質問ができるのがA評価というような提示をしていただいて、ああそうだな、と自分の中でも納得しました。しかし、実際の中で英会話スクールに行っている子は、流暢にフレーズが出てきますが、そういう子が少ない中だとなかなか自発的に出てこない。A評価の子は出てこない、ということで、こちらからこのようにも言えるよね、と引き出しを子供たちに与えていくものなのでしょうか。私が今考えたのが、最初は提示していって、子供たちも「これも+αで使えるんだ」ということで慣れてきて、その中でさらに単元が進む中で、決められたワード以外で使ってみよう、という感じで、1年間ステップアップしていって、A評価の子が増えてくるみたいなイメージでよろしいのでしょうか?

佐藤先生：

さすが清水先生、素晴らしいです。この後者です、まさしく後者です。実は、子供は何気なく言えるようにはならないのです。例えば、Really?　とか、Wow!　とか、ちょっと教えると、何でもまずこれらを使うんです。この間も、What's your name?　と聞かれて、My name is Kumiko.と答えたら、Really?　と。いや、reallyって言われてもね。だから、そういうものなんですよ。Really? しか言えない。だから、そういう時は、Oh, you are Kumiko.と言えばいいんだよ、と教えます。一番簡単な相づちは、繰り返すことですよね。例えば、What animals do you like? I like

lions.と子供が言った時に、Oh, you like lions.と繰り返す。あるいは、もっと簡単なのは、I like lionsと言ったら、Lions. I like pandas.とかね。Lionsって、1回聞くだけでもいい、そういうやり方もいいんだよ、と教えていると、子供は今度、毎回聞くようになりますよ。I like apples. Apples. I like oranges.など、何でもいいのです。だから、I like Japanese. Japanese? I like Math.と、何でも応用できるでしょう。ですから、そういうやり方を1つ教えてあげると、子供は今度、科目を習ったら、相手の好きな科目を繰り返すとか、何でも応用できるようになってきます。応用も意外と子供はできるので。でもまずは、先生おっしゃった通りです。まずは基本を教えてください。繰り返すあたりが簡単でいいですね。

亀田小：

こんにちは。剱持と申します。よろしくお願いします。こちらの本を読みまして、今日の話の中でもたくさん言われていたのが、「必然性」という言葉を使われていたと思うのですが。僕も以前どこかで習ったことがあって、自分も意識をしてやってきた時期に、子供が気付いたらたくさんその目標表現を使っていたから、そういう言語活動を準備できるといいんだ、と意識はしているんですけど、なかなかバチっと来るものが自分で創作できないというか。この中には例が書いてあったのですが、ぜひ何かいろいろな事例集をまた出していただければなと思います。

佐藤先生：

それはうれしいですね、ありがとうございます。Nice commentsです、うれしいです。今日はもう1日うれしい。でも、確かにそうですよね。ただ、私はね、小学校の先生はもう本当にお得意だと思っています。よく必然的な場面を言う時に、小学校でrock, scissors, papers, one, two, three.をせっかく習ったんだから、子供たちはどんな時に使ってみたいと思いますか？ どのような場面だったら、必然的にrock, scissors, papers, one, two, three.と思わず言いたくなるような場面があるでしょうか。

亀田小：

(給食の)おかわりのときでしょうか。

佐藤先生：

いいアイデアが浮かんだじゃないですか。給食のおかわり、絶対ですよね。でも、学生に聞いても、そういうアイデアは出ないんです。小学校の先生はピンとくるわけです。ゼリーが2個残ったのか、ドーナツが3個あるのか、大事でしょう。それが必然性です。あるいは剱持先生、What do you want now? どんなものが欲しいですかね、今。クリスマスプレゼントも近いですよね。どんなものが欲しいですか。

亀田小：

Holiday holiday, rest.

佐藤先生：

Rest. あぁ、疲れていらっしゃるんですね。 You must be so tired. Rest, I want a rest, too. いいじゃないですか、そういうようなものです。ですから、自分が聞いてみたいなと思うこと、自分が答えてみたいなということは、多分子供も一緒なんですよ。これが、1つのヒントになります。でも、今度は先生の言葉を胸に、アイデア集を書きましょう。ありがとうございました。

配信スタッフ：

ありがとうございました。皿沼小学校の先生方、いかがですか？

皿沼小：

足立区立皿沼小学校の佐藤です。本日はありがとうございました。普段の悩みなんですが、評価をするときに、「見取る」ところで、例えば「話すこと」について見取るときに、発表をグループでとか、English Adviserと一緒にということで見取れるようにやっているのですが、20人、30人という人数を効率的に細かく見取るには、どのようないい方法があ

るのかなと思って、教えていただければなと思います。

佐藤先生：

そうですね、発表などは、細かくやっていくと私はいいと思っているんですね。先ほどTシャツ作りの例がありましたよね。2文ぐらいのときにまず発表させるのです。例えば、What color do you like? I like blue. それをグループの中で練習をしたら、じゃあ今日は1班と2班ね、ってやってみせる。その子たち4人ずつどんどん、どんどん。それで、次の時間になったら、今度はWhat shape do you like? まで増えましたよね。今度はまた、5、6のグループやってみる。で、いろいろな過程に少しずつ評価をつけることはできますよね。発表と言うと、どうしても最後というイメージが強いのですが、グループで小さい発表を少しずつさせるんです。そうすると、最終的に一人で堂々と前に出て発表できるようになりますよね。そのようにしてみる。あるいは、Let's stand up. 私もよくするのですが、1列目と2列目、Stand up. と言って、例えばWhat food do you like? I like apples. Ok、sit down.のようなことを、今日は1列目と2列目で、全部で5回言わせる。来週は3、4列目というように、少ない単位で順番にされていくといいかと思いますね。最後だけと言うと、その時失敗したらかわいそうですもんね、子供もね。

配信スタッフ：

それでは横手市の方、お願いします。

横手市：

横手市立朝倉小学校の高島です。本日はありがとうございました。今、4年生を担任しているんですけど、「What do you want?」の単元で、たまたまちょっと面白かったので写真を撮ったんです。パフェを作るというUnit Goalでやった時に、子供がこういうのを作ったんです。（画像を提示）

佐藤先生：

わぁ、きれいですね、かわいい。

横手市：

私が子供に使わせたいものは、このフルーツのもので What do you want? とか、それとかHow many ～？ とか、数字をいろいろ使って、フルーツだったり、野菜だったりを使わせていきたいなと思っていたんですが、子供の中では、What do you want? と聞いたら、ひたすらバナナを集めている子がいて。（画像を提示）

佐藤先生：

そうそう。

横手市：

Banana,　いくつplease.などと言って、店に並んでいるバナナは毎回、毎回、One banana please. 1個のバナナを買って、One banana please. 2つのバナナ、Two banana, please.と言って、最終的に子供が発表した時には、This is my parfait. I like one, two, three, four, five, six, seven, seven bananas. This is my parfait.と言って、笑っていたんですけど。女の子なんかは、This is my parfait.（画像を提示）

佐藤先生：

カラフルですね。

横手市：

one peachとか、two strawberriesとか、いろいろなものをたくさん使っていたんですけども。両方いいなと思ったんです。でも、本当にバナナしか集めていない子も、A評価にしていいのかどうかということを悩みました。でも、その子はひたすらバナナを集めて、How many ～？ とか、Banana please. などと言っていたのですが。その辺はどうかと思いまして。

佐藤先生：

必ずいますよね。1種類にそろえる子。私も見たことあるんですよ。全部グリーンでした、その子は。だから、I like

melons. I like kiwi fruits. I like cucumbers.と、全部グリーンのものを入れたパフェでした。きれいなものでしたよね、なかなかね。だから、これは先生方が決めればいいことなんです。例えば、途中はいろいろな練習をしなければならないし、果物の名前もバナナだけでは困るので、今日は3個入れてね、とか、1時間目は3個入れるんだよ、2時間目は5個入れるんだよ、最後の発表は好きなものだけでいいから、と先生方が言ったお約束をしたら、バナナだけだってA評価じゃないですか。ただ、ダメ、今日は全部3種類入れなきゃ絶対ダメ、でも1つ好きなものはたくさん入れていいよ、だったら、one apple, one orange, but five bananas　だったら、それはA評価ですよね。気持ちがこもっている。そんな感じでどうでしょうか。でも、すごく楽しそうな活動ですね。とてもいいと思います、子供たちが喜びます。ぜひ、お続けくださいね。ありがとうございます。

==========

配信スタッフ：

では、佐藤先生、最後に一言お願いします。

佐藤先生：

今日は本当にいろいろ質問を出していただいて、本当に楽しく研修ができました。この後、講義の後のタスクを用意しております。それで、実は私も何か、先生方からご要望が出るのではないかなと思って、事後タスクには、先生方のアイデアや評価についても書いてください、考えてください、というのを用意しておりますので、ぜひまたそれを皆さんで取り組んでください。そして、次回のまとめのお話の時にその種明かしをします。例えばこんなことができるよ、というのをやりますので、ぜひその前に皆さんで考えていっていただけるとうれしいです。

今日は本当にこうしてオンラインで、足立、浦安、横手、いろいろな地域を結んで、そしていろいろな先生方とお会いできて、このような研修ができたことは、本当に楽しかったです。また、こんな機会があるといいなと思っております。日々大変なことも先生方はおありだと思いますが、どうぞ頑張って、子供たちのコミュニケーション能力をご一緒に上げていきたいと思います。本日はありがとうございました。